

正岡子規と原抱琴 ―俳句革新運動の一側面

一、子規の俳句革新運動

「明治の俳句といふ、しかも明治の新俳句が世に出でたるは明治二十五年以後の事とす」

これは明治三十一年に書かれた「新俳句のはじめに題す」（『ほととぎす』第十五号）の冒頭の一文である。ここには明治二十五年以降、「新俳句」の運動が始まり、この六年の間に、おそらくは自らの予想をも越えるような勢いで全国に浸透していったことが静かな自信をもって語られている。無名の一書生に過ぎなかつた子規は、「新俳句」の提唱者として数年の間に全国にその名を知られる俳句界のリーダーとなつていた。

一介の書生から「新俳句」の提唱者に至る子規の歩みはどのようなものであつたか、それを次に辿つてみたい。

明治二十五年六月、文科大学国文科の学生であつた正岡常規（これが本名で「子規」という雅号は明治二十二年、嗜血した折、その病名にちなんでつけられた）は、進級試験に落第した。ドイツ人教師であつたリース先生の、英語で行われた歴史の授業にろくに出席しなかつたことや、出席してもそのドイツ語訛りの英語を聞き取れなかつたから当然であらうと、後年の回想にいう。歴史の授業だけでない。子規は大学で教えられる勉強そのものに倦んでおり、それに代つて俳句に熱中するように

なつていたことが背景にある。皮肉なことに試験勉強を始めると俳句が浮かぶ、といった具合で自ら「これ程俳魔に魅入られたらもう助かりやうは無い」（『墨汁一滴』）と記している。つまり俳句の魅力にとりつかれたための不勉強であり、その結果の「落第」を契機として自ら選んだ退学であつた。

といつても文学全般に広い関心をもつていた子規のことである。俳句のことばかりに熱中していたわけではなく、二十五年一月、小説『月の都』を執筆し、幸田露伴の批評を求めている。露伴は前年『五重塔』を出版、子規はこれを読んで感激し、もし才あらば小説家として立たんとする思いもあつた。だが露伴の批評は芳しいものでなかつた。子規はいさぎよく、小説家への道を断念し、わが道を俳句へと思ひ定めていった。

落第した子規は、文科大学を退学したい旨、『日本』新聞社長の陸羯南に相談した。羯南は、子規の叔父、加藤拓川の親友であり、子規が十六歳で上京したのは、この拓川を頼つてのことだつた。ところが、子規が上京するや間もなく、拓川はフランス遊学の途に上つた。その際、甥の子規を羯南に引き合わせ、よろしくと頼んだ。こうした縁もあつて子規は在学中にすでに『日本』新聞に「かけはしの記」（二十五年五月二十七日が第一回で、以後、六月四日まで計六回）を発表していた。これが

黒 澤 勉

（岩手医科大学 教養部 文学）

『日本』新聞への初登場である。続いて「瀨祭書屋俳話」の連載（二十五年六月から十月にかけて計三十八回）を始めた。それは小説家断念の上立って、俳人としての道を切り開いていこうとする最初の評論であった。子規が「明治の新俳句が世に出でたるは明治二十五年以後」という時の、その「明治二十五年」とは、具体的には『日本』新聞連載のこの評論によるのである。

落第を機に退学したい旨相談をうけた羯南は、それに反対した。しかし、子規の意志は固かった。退学を考えた時、子規は同時に『日本』新聞社員として文学活動を展開したいと考えていたのである。退学の相談は、社員として自らを採用してほしいという願いでもあった。羯南とすれば、親友拓川の甥であり、利発で、意志の強い子規を採用するに何のためらいもなかった。それに『日本』新聞がそもそも鹿鳴館時代と呼ばれる当時の軽薄な欧化主義、上すべりな西洋模倣を強く批判（羯南自身、厳しい政府批判のために幾度か投獄され、新聞は何度か発売禁止の憂き目にもあっている）伝統精神の継承発展を説くものであったから、俳句をはじめとする日本文学に深い造詣をもつ子規の存在は『日本』新聞編集の上でも大きな力になるであろうと期待した。ただ、気がかりなのは、子規が病弱なことである。結核は戦前においては、死に直結する病いであり、これといった治療の決め手のない難病であった。

羯南は、故郷の松山から母と妹（この時母八重は四十八歳、妹の律は二十二歳であった。父は子規五歳の時に早世している）を迎えるがよろうと提案し、子規もこれに同意した。明治二十六年一月、二人は松山を発つて子規のいる根岸に着いた。根岸の子規の借家は羯南の借家の西隣（下谷上根岸八十八番地、金井ツル方がその住所であり、子規庵として現在この地に保存されている）であり、子規は公私にわたって羯南の庇護を受けることになった。

以後、明治三十五年九月十九日に至るまで、社会的には『日本』新聞に支えられ、家庭においては母と妹の手厚い介護を受け、病者とは思わ

れない程の、縦横無尽の文学活動を展開していく。その基盤が定まったのが『日本』入社であり、母妹との同居である。

それが文科大学落第によって始まったのは、子規自らいうように「余の人生は落第をもって始まった」といつてもよいのかもしれない。「落第」や「病氣」や「貧乏」などといったマイナスを逆にプラスに転じていく向日性が子規にはある。それにしても、三十二年七月碧梧桐の兄、河東銓に宛てた生前の自作墓碑銘に「日本新聞社員タリ」と記したのは、実に千金の重みがある言葉だった。『日本』新聞入社なかりせば、子規の文学活動はなかったといつてよい。

一般的にいつて、新聞は俳誌や歌誌と比べて、読者が圧倒的に多い。多くの人に名が知られやすい。しかも「連載」という形を取ることによつて、持続的に子規の名は全国に広がつていくこととなった。『日本』新聞は当時、発行部数四七〇万部（明治三十一年）を超える大新聞であり、特に東京府以外の他府県の読者が多かった。子規の文学史上に残る大きな仕事はこの『日本』という新聞を通して、中央と地方をつなぎ、全国に「新俳句」の運動を起こした点にある。

それでは子規の提唱した「新俳句」なるものは、どのような内容、特色をもつものであったのだろうか。子規は冒頭に引用した言葉の後に続けて次のように書いている。

「明治の今日に及びて俳句再び興り俳風一新す、之を内にしては文化文政以後下流社会の玩具に供せられたるのみの俳句は詩人の脳裡に新生命を得て元禄天明を凌がんとす、之を外にしては古来老人の閑事業として余喘を社会の一隅に保ちたる俳句は少壮者のために發揮活動せられて其高雅の趣、富贍の想、銳利の語は、彼の千余年間腐敗し盡せる和歌を压倒し、始めて天下公衆の歓迎を受くるに至りぬ、時勢の赴く所、俳句は古来未曾有の盛運に達するを得たるなり」

（『ほととぎす』第十五号 明治三十一年三月三十日）
俳句の歴史をみると、元禄、天明と二つのピークがあった。それ以降、

俳句は卑俗、粗雑、陳腐なものに墮していた。しかるに明治の今日に至って、新しい生命を得て、元禄、天明を凌ぐほどの勢いである。これまで老人の趣味としてわずかに虫の息をつないでいた俳句は、明治二十五年以後の「新俳句」の運動を通して青少年達の文学となり、その高く雅びな趣、豊かな発想、鋭い言葉は千年余りに渡って腐敗してきた和歌を圧倒し、多くの人々に歓迎されるようになった。その結果、かつてないほどの隆盛をみているという。

子規の「新俳句」の特徴は、ここにいうように、老人の趣味にすぎなかった俳句を、青少年―特に明治になって誕生した新しい「書生」階級の文学としたことにある。そのことが可能であったのは、子規自身十年にもわたる書生生活を体験し、その中で俳句に関心を寄せ続けてきたこと、また俳文学史に精通して、俳句に対する明確な展望と、鋭く的確な批評眼をもっていたことである。

「獺祭書屋俳話」という研究的、評論的著作によって子規は多くの人の心を捉え、ことに若い書生達の俳句への関心を盛り上げた。翌明治二十六年、『日本』の文芸欄が拡充して、俳句欄が新設された。子規の文章に心魅かれた人々は、ここに自らの作品を投稿、これが「日本」派俳句＝子規派俳句の端緒を開くことになった。『日本』新聞を媒介として、子規と投稿者との交流が深まっていった。

「新俳句」のもう一つの特色として、俳句の文学としての純化運動ともいふべきものがある。

「明治の俳句といふ、或は明治年間の俳句を盡く含むとす者もあらん、されど余の所謂明治の俳句は彼俗宗匠輩、月並者流の製作を含まず、蓋し彼等の製作の拙なるを以ての故に之を斥くるのみにあらず、彼等は不当の点を附して糊口の助となすの目的を以て之を作り、景物懸賞品を得るための器用として之を用うる者、其目的已に文学以外に在り、文学以外に在る者固より俳句と称すべくもあらざればなり」(「新俳句のはじめに題す」『ほととぎす』第十五号 明治三十一年三月三十日)

ここにいうように俳句は「月並」の宗匠俳句として墮落し、宗匠達は、自らの生活の資として俳句の添削を行い、景物や景品つきの俳句が広がっていた。子規はこれについても厳しく批判し、金を目当てとするのであれば、それは文学、俳句とはいえない、と主張した。

子規の俳句革新運動の拠点となったものに『日本』新聞の他に、俳誌『ほととぎす』の刊行があつた。『ほととぎす』は明治三十年一月、松山で柳原極堂が創刊したものである。そのきっかけとなつたのは二十八年、日清戦争従軍記者として遼東半島の柳樹屯、金州、旅順に赴いた子規が帰国の船中で咯血、神戸病院で生死の間をさまよい、須磨保養院の入院療養生活を経て松山に帰省、漱石の下宿に仮寓し、そこで五十一日間を過ごし、その間連日のように句会を催したことにあつた。帰京後、子規は『日本』に「俳諧大要」を連載したが、そうしたことも刺激となつたであろう。誌名の『ほととぎす』とは「子規」の訓読みであり、師としての「子規」の名を称揚したものである。子規上京後、松山にあつて『ほととぎす』を刊行していた極堂はやがてそれを負担に感じるようになっていた。

一方、子規に育てられて俳句への関心を深め、実作も積み重ねていった虚子は東京で俳誌刊行の意志をもつようになっていた。子規は極堂に『ほととぎす』を虚子に譲ってくれないかと頼み、ここに松山刊行の『ほととぎす』が東京刊行となり、虚子の経営的才覚もあつて全国的な俳誌として成長していく。

『ほととぎす』に寄せる子規の期待は大きく、「新俳句」の拠点として自身も死力をふりしぼって熱い原稿を寄せた。

「ほととぎすの規模は大にせざるべからず、ほととぎすは新俳句の機関として成功せざるべからず、ほととぎすは今後生存競争の渦中に立たざるべからず、而して吾人は此ほととぎすを編輯し維持し扶掖し擴張せざるべからず。余一身を以て言へば、病余の廢軀、立つ能はず、行く能はず、一日の安をも得る能はざる境涯に在りて、間を窺ふて書き、苦を忍

んで書き、褥に伏して書き、夜を徹して書く。一部の地方的雑誌ほととぎすを書くにすら苦辛いふべからざる者あり。今より後中央的雑誌ほととぎすを書くべきを思へば余はそぞろ刑場に引かるるの感無きにあらず。然り余はほととぎすと終始せんと欲する者なり。余死すとも固よりほととぎすは死せざるべし、しかもほととぎす死するの日は即ち是れ余の死する日ならざるべからず。ほととぎすは余の生命なり」(「ほととぎす発行処を東京へ遷す事」『ほととぎす』第二十号 明治三十一年八月三十一日)

この文章に伺われるような、子規の病苦必死の思い、強い覚悟は多くの読者の心を捉えた。「ほととぎす」の発展は、こうした子規の熱い思いとそれに共感する読者層の広がりによって飛躍的な成長をとげていく。続く文章にいう。

「現在に於けるほととぎすの読者諸君は真成にほととぎすを扶助するの好意を有せらる者と信ずるが故に余は諸君に対する親戚故旧の情を以てし、時々、ほととぎす一家の私事を漏らして其同情を乞ひたりき」(同)

こうした文章は単なる趣味としての俳句のつながりというものを越えて子規と門人達、あるいは門人同士の強い結束を固めた。

松山という地方出身者であった子規は、地方の俳人に期待するところも大きく『ほととぎす』によって全国的な新俳句運動を起こせうとした。「ほととぎす」発刊一年を視した文章の中で子規は次のように書いている。

「吾人が常に耳にする所を以てすれば、俳句界に入りて忽ち小成に安んじ謂ゆる天狗的なる者に至りては比較上地方俳人に多しと聞く、事の真偽は固より知る所に非ずといへども万一此の如き事あらんか地方の俳句界は日ならずして腐敗し了らんとす、是れ杞憂措く能はざる所以なり、今や俳句は漸く地方に伝播し將に僻陬(へきさう)に及ばんとす、俳句界の運命が地方俳人によつて支配せらるるの日応に遠きにあらざるべし、地方俳人諸君の任夫れ重いかな、つくづくと来年思ふ燈下かな」(「ほととぎす」

の一周年に際して」明治三十一年一月三十日)

地方の俳人を叱咤し、激励する思いのこもった文章である。

以上のように、新聞『日本』と俳誌『ほととぎす』の二つの車輪によつて子規の「新俳句」運動は天下を席卷する大きな文学運動となつていった。子規はそのリーダーとして、広く日本全国の俳人達の動向、その特徴を把握し、指導者として青年達を導いていくのである。

二、子規と抱琴

今年(は)原敬(は)らたかし」が正式な呼び方であるが、盛岡市民は親しみをこめて「はらけいさん」と呼ぶことが多い(生誕百五十年にあたる。それにちなんで、あらためて敬の業績や人物を掘り起こし、これに学ぼうという雰囲気がある)が、原敬記念館も敬顕彰のためにこれまでにない積極的な活動を展開していることは、大変うれいことである。

文学者の場合、書いた作品が時代を越えて人々の胸を打つから、たとえその生涯が恵まれないものであつたにせよ、後世に至るまで直接、作品の息吹に触れて共鳴する人々を得ることが出来る。それに対して政治家は、その時代にあつて人々を動かす、直接、人々の幸せにつながる政策や事業を推進するにもかわからず、後代まで共鳴者を得ることは難しい。

「政党政治の基礎を作つた」「教育の充実をはかつた」「交通網の整備をした」「国際協定の観点から軍縮条約を積極的に結んだ」などといった原敬の為政者としての活動というのは、その時代の人々にとつて大きな喜びであり、(現在に至るまで)人々に幸福をもたらす施策ではあつても、時代を過ぎると忘れ去られがちである。政治は文学のような単独者の営みでなく、立場や利害の異なる人々を束ね、組織の力をもつて政策実現をめざすものである。多くの人間の利害の対立や打算の渦巻く政治の世界にあつて、理想・理念をもつて貫くということは難しいことであらう。

原敬は政治的な人間として最も傑出した人物とされている。明治以降の政治家の中で最もすぐれた人物は誰か、という問に対して、原敬をその筆頭にあげる研究者が多いのである。敬はすぐれた識見、豊かな知識、教養、冷静にして現実的な判断力、勇氣、誠実な魂をもった人間であったようだ。そうした敬の政治的人間としての魅力を学ぶ雰囲気は盛り上がったってほしいものである。それは、真のリーダーとは何かを考え、岩手に新しい優れた政治家を生む刺激にもなるであろう。

話は変わるが、その原敬に子が授けられなかったことは残念なことである。二代目政治家が必ずしも、その親を越える立派な政治家になるとは限らないにせよ、親として自らの経験を直接に受け継いでくれる子の誕生を望むのは自然なことであり、子も又、その多くを親から学ぶことができる。二代目はどのような職業にせよ、一代目より恵まれていることは確かである。考えてみれば原敬に限らず、宮沢賢治、新渡戸稲造など、岩手の生んだ世界的スケールの人物はいずれもわが子をもたなかった。

(新渡戸稲造の場合、メアリー夫人との間に子をなしたが誕生後、間もなく亡くなっている)しかし、それに代って多くの人々に感化を与え、広い意味での「教育者」としても、その影響力の大きさははかりしれないものがある。賢治や稲造は確かに「教育者」でもあろうが、原敬はどうか、という声があるかもしれない。しかし、原敬の生きかたを知ること、また別の意味で教育的価値を有するものだと私は思う。

二度の結婚をしたものの、わが子に恵まれなかった原敬は、兄の恭(ゆたか)の二男として生まれた達(とおる)を自らの後継者として期待していたようである。家長制度の時代であり、家督を継ぐ男子によって「家」の継承がなされた時代であるから、子の誕生は悲願であり、それが授けられぬとなれば、同族の中から子を預かり、養子として育てるのは、一般的なことであった。

原敬の甥、原達は明治十六年(一八八三年)本宮村に生を享けた。叔父の敬は安政三年(一八五六年)生まれであるから二十七歳年上である。

達は岩手師範附属小学校を経て、明治二十八年、盛岡中学校に入学し、仁王小路に下宿しながら通学した。明治三十年、三年生の時、当時の盛岡中学校を包む文学熱もあって、回覧雑誌『もしほ草』や『鉄拳』を発行、その主筆となっていた。達を心から敬愛し、同じ『日本』派の俳句に親しんでいた野村重舟(長一。後の胡堂)によると、後者は地味な研究的な雑誌であり、韓退之(かんたいし)や蘇東坡(そとうば)ばりの論文が大部分を占めていたという。達は後述するように俳句に熱中しているが、評論を得意とする論客でもあり、弁論にも長けていた。

この抱琴について金田一京助は次のように書いている。
「一年上の級には原抱琴、小笠原鹿園などという方たちがいて、当時最高の文学雑誌であった『文庫』の寄書家で、天才的片鱗をうかがわせ、盛岡中学の文学的胚種をうえつけた」

また、野村重舟も次のように書いている。

「平民宰相原敬の甥に、原達君―抱琴―という秀才があったことを御存知の方も少なくないことであろう。明治四十五年、算へ三十歳の若さで亡くなっているが、これが非常に優れた人物で、今でも友人達の間に、懐かしい思い出の数々を遺しているのである。」

一代の大人物原敬も、甥の達には何をやっても叶わなかったということである。仏蘭西へ行ったこともある外交官あがりの原敬も、フランス語では達君に及ばず、法律の方では毎々甥の達君に教えを受け替っては何目か置かされ、俳句の方では宰相原一山も甥の抱琴のお弟子に過ぎなかったというわけである。

従って叔父の原敬が、甥の抱琴を可愛がったことは非常に私はその叔父甥の間の美しい情愛のことを幾度か雑文で発表した。宰相原敬ばかりでなく、周囲の者は誰でも聡明寛達な美少年、原達君に心ひかれぬものは無かったと言って宜い。」「(雑文クラブ)八月号 昭和二十七年)

これらの文章でもわかるように、原達は一人重舟のみならず、盛岡中学校の生徒達を魅きつけ多くの級友の尊敬を集めていたようである。し

かし、達が盛岡中学に在籍したのは三年間で（旧制の中学は五年制である）、明治三十一年四月六日、上京して東京府立日比谷中学校への編入試験を受けて合格、転校している。

なぜ盛岡中学三年にして転校したのであろうか。それは本人の希望以上に、叔父敬の強い希望があったようである。敬はこの時、四十三歳で大阪毎日新聞社の社長であったが東京の芝に邸宅があった。

転校の前年、明治三十年七月二十六日から達は、暑中休暇を利用して二十日間ほど原敬邸に滞在、敬の大磯の別荘で海水浴をして過ごしたりしている（原敬日記による）。おそらくこの時の上京、原敬との話し合いが盛岡中学転校のきっかけとなったと思われる。敬自身、十六歳で上京して東京での勉学を積み重ねながらその地位を築いた身である。達に一刻も早く上京して東京での学問に励め、自分が一切のめんどうを見るから、と言ったのである。達は夏休み中、東京の息吹に触れ、向学心を刺激されて同意したものと思われる。養子縁組こそしていなかったが、ゆくゆくはと、おそらく約束もできていたのであろう。達の父、恭としても、東京で、着々と地盤を固めている弟、敬のところにわが子を送ることに何の不满もなかったろうし、優秀なわが子が東京のエリート校に進学すると思えば、期待に胸ふくらむものもあつたであらう。また、南部藩の家老の家柄でありながら、東京・大阪で活躍、全国に名を知られつつある弟、敬の後継者を育てるということは、一門の長としても歓迎するところであつたと推察される。

日比谷中学校に転校した達は、盛岡中学時代から親しんでいた正岡子規の提唱する「新俳句」（子規は新聞『日本』を拠点に俳句革新運動を展開したところから「日本」派とも呼ばれた）への関心を一層深めていった。九月二十七日付の日比谷中学の友人太田太空に宛てた書簡に「琴を抱いてわれ人なりけり秋の暮」があり、それまでの「村雨」の号を捨て、以後俳人として「抱琴」（以下「達」を「抱琴」と記す）と号している。俳人「抱琴」は、子規派の俳句への傾倒の中から誕生したといつてよい。

松山で発行されていた『ほととぎす』が高浜虚子の手によって東京移転となったのはこの年の十月のことである。盛岡肴町の「久保庄」書店に産まれた佐藤雲軒（友吉）も移転当初からの投句者であり、翌三十二年の一月号にはすでにその句が『ほととぎす』に見えている。抱琴の句も坂本四方太選で四句も掲載された。

東京に移り、原敬邸で暮らす身となったものの、抱琴は盛岡中学の文学グループと交流を深め、大きな影響を与えていた。八月十日、帰郷中の抱琴の斡旋で盛岡中学の「みどり会」（岩動露子・岩動炎天・野村董舟・猪川箕人・猪狩五山）と社会人の「みどり会」（佐藤雲軒ら）が合併し、「杜陵吟社」が結成されたのはその何よりの証である。

投句だけで物足りなくなった抱琴は、十月二十五日、虚子庵の例会に参加、「裏戸出て黄菊切りけり露時雨」の句が並み居る先輩の俳人達を尻目に最高点を獲得した。次いで、十二月二十四日、初めての子規庵に参じて蕪村忌にあづかっている。

新聞『日本』や俳誌『ホトトギス』の評論を通して心惹かれていた抱琴の、子規に初めて会った感動はいかばかりであつたろうか。子規は脊椎カリエスのために病み衰えた体を病床に横たえていた。しかし、病苦にもかかわらず、明るく、親しみ易い口調で語りかけた。何より驚いたのは、俳句をはじめとする文学に対するその情熱であり、病床を囲む人々のうちとけた、温かい、真実な雰囲気である。そうしたものが、年若い抱琴の心にしみた。一方、虚子庵の句会で一同を驚かせた抱琴の噂を聞いていた子規も、自分の目の前に現われた抱琴のあまりの若さに驚いた。子規は「君が抱琴か」と幾度も尋ねたという。子規は三十一歳、抱琴はこの時十七歳であつた。

翌三十三年、子規は「明治三十三年の俳句界」（『日本』新聞）において、「新俳句」の俳人達を東京と地方に分かつて紹介している。その中で「東京」において「新に三十二年中に頭角を露はしたる者」として「抱琴」の名を揚げている。

子規は抱琴と語りあううちに、不思議な運命の糸で結ばれているような親しみを感じた。

第一に、子規も叔父加藤拓川（たくせん）を頼って松山中学校を中退して上京し、学問に励もうとした身である。松山藩、南部藩と藩は異なり、片や松山、片や盛岡、出身地は異なるとはいえ、共に士族であり、将来への大望を抱いて上京した書生である。子規は抱琴に、若い日の自分を見るような思いを抱いたに違いない。

第二に、子規の叔父で、東京遊学を認め、子規に東京に来たれと書き送った加藤拓川は、原敬と同じ司法省法学校に学んだ友人である。同校において、拓川・陸羯南・福本日南・国分青崖らが寮の食事の問題で校長と対立、「将来に見込なき者と認む」という烙印を押されて全員放校処分になった。敬はこの時、局外に居たが、義侠心に駆られて時の文部大臣にまで建議書を提出して自らも退学処分となった。敬と処分された書生達の間には、深い絆があったこと、敬の友情の厚さが知られる一件である。

原敬と加藤拓川はその後、パリで再会している。外務省入りしフランス公使館に赴任していた敬は、留学中の拓川が外務省勤務となるようにとりはからい、拓川は三十年以上、パリに外交官として過ごすことになった。また羯南は、後に新聞『日本』を興した。子規が出社などかなわぬ病いに苦しみながらも経済的に自らを支えることができたのは終生『日本』社員として給与を受け取っていたからである。それは羯南―拓川の友情の産物でもあった。その羯南、拓川の友人である敬の甥が尋ねて来ようとは……子規は退学組の深い絆が、この抱琴にまで及んでいることを感じたに違いない。

第三に、抱琴は自分の母校である第一高等学校に学ぼうとする学校の後輩であり、俳句にも深く心を寄せているということである。

子規の抱琴に寄せる親しみは、抱琴が喀血したということを知りてさらに深まった。

明治三十三年、抱琴は日比谷中学校を卒業し、同年九月、第一高等学校に入学した。入学後も抱琴は子規庵の句会に参加、叔父の敬が心配するほどの俳句への熱中ぶり、翌三十四年四月には岩動露子らを伴って子規庵を訪問している。

抱琴が思いがけない病魔に襲われたのは、その翌年（明治三十四年）の五月であった。

原敬日記の五月十五日の記述に「未だ弱冠じやくかんに至らず、斯か大患に罹る、真に痛嘆に堪へたり。事情詳細を認めて盛岡なる家兄の許に送りたり」とある。父、恭は敬からの書簡をみて、驚いて上京した。病名は「肺炎カタル」ということで、抱琴は休学して、赤十字病院に入院の身となった。この入院中、子規は弟子の松下紫人を通して見舞い、「同病相憐」の詞書を添えて「寢床並べて毒食はばや話さばや」の句を送った。子規にとつて抱琴は門人、後輩ではなく、同じ病を生きる「隣人」でもあった。「子規先生」という子規追悼の文章の中で抱琴は次のように書いている。「昨年の夏であった。僕が肺病に罹って赤十字病院に入院して居た時、先生が紫人に『抱琴に遇ったなら、発句を作れば病気はなほると言つて下さい』と云はれたと云ふ事を聞いたのである。僕はこの語を聞いて実に先生の偉大なることを感じたのである（中略）ああ『俳句を作れば病気はなほる』と先生の生涯は実にこの一気を以つて貫いて居るやうに思ふ。医者をしはしば驚かして、今日までもひどい身体を保たれたのは実にこの信仰の力であると僕は信ずるのである。僕は遂に永くこの一語を忘るることは出来ないのである。僕はこの一語を以つて、広く天下の肺を患ふるところの俳人の座右に薦めたいと思ふ」（『ホトトギス』明治三十五年十二月）

抱琴は、子規と同じ結核に罹って一層、子規の存在を身近なものに感じた。そして病苦を生きる「信仰の力」を子規に感じ、尊敬の念をあらたにしたに違いない。

日本赤十字病院を退院した抱琴は、その後、海洋療法などに努め、幾

分、病状は回復、明治三十五年、年賀の挨拶に子規庵を訪れた。子規は自ら末期的な病状に苦しみながらも抱琴の身を案じ、ユーモアのこもった戯文を添えて、奈良茶飯と蕪の漬物をみやげとして持たせた。

子規が亡くなったのはこの年九月二十一日のことだった。抱琴は子規逝去の知らせを聞いて、「朝寒の芙蓉の下に慟哭す」と詠んだ。子規を失った打撃がどれ程深いものであったか察せられる句である。

十一月十六日、根岸の子規庵で、子規の追悼句会が行われたが、抱琴はこれにも参じ雁来紅がんらいこうのもゆる即仏すなわちかなと詠んでいる。「雁来紅」は、秋、雁の来る頃に紅色になることからハゲイトウのことをいう。「鶏頭の十四五本もありぬべし」は子規の句として有名であるが、この句は抱琴が子規庵の庭で見た燃えるように色づく鶏頭に、子規の生涯を託して詠んだものである。

子規没後、抱琴の俳句熱は少しずつ醒めていった。それは子規という心の抛り所を失ったことが大きいであろうが、敬が「俳句に熱中し過ぎないように」いさめたことも影響している。抱琴の日記には「この夜伯父己れを誡めて曰く語学を研究しこれに会話を勉強せよ。俳句を課程とする勿れと。己れ曰く諾諾ななな」(明治三十二年十二月十三日)とある。甥として抱琴はきわめて素直であつたらしい。敬の言葉に一言もなく、自らの俳句への熱中ぶりを反省して学業に打ち込むことを約束しているが、句作への情熱はその後も続き、三十三、三十四年ごろがピークだった。

抱琴は明治三十四年に一年間休学した後、復学し、第一高等学校を卒業、明治三十六年、東京外国語学校フランス語科に入学、三十九年に同校をトップの成績で卒業、東京帝大法科に学んだ。ここでも相変わらず主席を続けたものの、いよいよ卒業という時になって宿痾が再発、四十三年九月丸の内の日本赤十字病院に入院、翌年五月に帰郷して静養に努めた。しかし、四十五年一月十七日、帝大三年に在籍のまま三十歳の若さで亡くなった。墓は原家の菩提寺大慈寺にある。

ちなみに、啄木が亡くなったのはこの三ヶ月後の、四月十三日のことである。啄木は抱琴が日比谷中学に転校した後に、盛岡中学に入学している。抱琴転校後の入学ではあつたが、金田一京助や野村堇舟らの先輩とも交流のあつた啄木は、抱琴が明治三十五年十月帰省して上京する際、抱琴送別の写真を共に撮っている。友人の内田秋皎(直)の日記には抱琴を送る気持ちを「心腸切々、言を發す能はず、只、目を以て送るのみ。目亦留別の泪あり、帰途のせきれう誰も等しく感じたるべし」と記している。抱琴が盛岡中学の仲間達にどれ程慕われていたかが察せられる。興味深いのは、高橋写真館で撮つたその送別の写真の中に、抱琴の隣、ほぼ中央に啄木がいることである。

啄木の胸の中ではすでにその一週間後の、自らの上京が決定されていた。抱琴に続いてという思いがあつたことは間違いないであろうが、そのことは日記に記されていない。啄木は十月三十日、洪民の我が家を發ち、盛岡で中学の仲間達に退学して上京する旨を語つた。突然の上京に皆、驚いたという。抱琴が送られたように、啄木もユニオン会のメンバーに送られ、記念写真も撮つた。上京後、啄木は抱琴に連絡をとり、その葉書も受け取つたが、抱琴は大阪の原敬のもとにあり、この上京中には会えなかつた。しかし、北海道での流浪の生活の後、再び上京して金田一京助の援助を受けていた時(明治四十一年)、抱琴に会っている。

若くして逝つた啄木と抱琴、そして子規や原敬、加藤拓川、陸羯南などの織りなす人間模様は、なかなか興味深いものがある。

(本稿をなすに当たつて浦田敬三氏の『明治の俳人 原抱琴』を参考にし、また直接ご教示頂いた。記して感謝申しあげる)

(受付 二〇〇六年一月八日)